The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	Eigentlichkeit における関心について
Author(s)	中橋, 誠
Citation	メタフュシカ. 2017, 48, p. 17-27
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/67692
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

Eigentlichkeit における関心について

中橋誠

ハイデガーの用語である Eigentlichkeit には、一般に「本来性」という訳語が与えられている。しかし、Eigentlichkeit は、「言葉の厳密な意味において用語として選択されている」――Uneigentlichkeit と並ぶ――存在様態（Seinsmodi）（SZ, 42f.）であることが考慮されるなら、「自分のものとされた存在様態」と訳されるべきである[1]。

しかし、Eigentlichkeit の「逐語訳」が、すなわち、「言葉の厳密な意味」が own-ness や owned-ness（自分のものとされていること）であることを理解しているにも関わらず、「標準的な翻訳」であるとの理由で「本来性（authenticity）」という訳語を使用する解釈者がいる[2]。このような解釈者は、Eigentlichkeit（自分のものとされた存在様態）を言葉の上でしか理解していないのであろう。そして、このような無理解をひきおこす原因の一つは、かつてアドルノがハイデガーの Eigentlichkeit について述べた「言語は eigentlich という語を流動的に用いている」、「ある概念において何が eigentlich かという判断のなかにも、この概念に対する関心が入り込んでいる」という問題に求められよう[3]。だが、アドルノの指摘を認めるならば、Eigentlichkeit という概念にどのような「関心（das Interesse）が入り込んでいるか」が明らかになるなら、そこから、かえって、ハイデガーが用語として選択した Eigentlichkeit に関する無理解の幾つかが避けられるのではないか。本稿は、このような無理解を避けるために、ハイデガーが Eigentlichkeit という概念に込めた関心が何かを明らかにしたい。

1．Eigentlichkeit についての具体的な記述

ハイデガーが Eigentlichkeit という概念に込めた関心はどのようなものか。この点を確認する

---

1 eigen は一般に「自分（自身）の」という意味をもつが、その原義は――「所有」を意味する動詞の過去分詞 eigan に由来するがゆえに――「所有された」である。

2 Denis McManus, Introduction in: *Heidegger, Authenticity and the Self, Themes from Division Two of Being and Time*, edited by Denis McManus, London and New York, Routledge, 2015, p.5.

3 Theodor W. Adorno, Jargon der Eigentlichkeit, Zur deutschen Ideologie, in: *Theodor W. Adorno Gesammelte Schriften, Band 6*, herausgegeben von Rolf Tiedemann unter Mitwirkung von Gretel Adorno, Susan Buck-Morss und Klaus Schultz, Suhrkamp Verlag, Frankfurt am Main, 2003, S.495.

ために、ハイデガーが Eigentlichkeit に与えた記述が具体的にどのようなものであるかを見てみよう。Eigentlichkeit そして Uneigentlichkeit については、「カッセル講演」（1925 年）に極めて具体的な記述が見いだされる。まずはそれを見てみよう。

> さて、この現存在であるのは何者か。大抵の場合、そして、さしあたり、われわれはわれわれ自身ではない。われわれの生の基盤は、《ひと》が話すもの、《ひと》が判断するもの、《ひと》の事象の見方、《ひと》が要求するものである。定かならざるこのような《ひと》こそが現存在を支配している。《ひと》はさしあたり、そして、大抵の場合、現存在を真の意味で支配しているのであり、学問すらこれに基づいている。《ひと》の問い方、《ひと》の探究への取りかかり方が示されるのは、伝統においてである。人間の相互の共同現存在を支配するこの公共性からはっきりするように、われわれは大抵はわれわれ自身ではなく、他者なのであり、われわれは他者に生かされている。この《ひと》は何者か。それは目に見えず、定かならず、何者でもない。しかし、取るに足らない無ではなく、われわれの日常的現存在の真の意味での実在性である。この《ひと》としての現存在は、その傾向として、世界に目配りするうちに自己を喪失し、自己それ自身から脱落する。人間は日常性においては自分のものとされていない。そして、自分のものとされていないこのあり方が、人間的現存在の現実の特徴の第一に他ならない。これが極めてはっきりするのは、ギリシア人がすでに看取・定義していた人間の根本的なありようからである。人間はゾーオン・ロゴン・エコン（ロゴスを持つ動物）である。話し好きのギリシア人にとって、人間は話すもの（sprechend）とされている。論じるということ（die Rede）が、われわれの存在の根本構造として選び出されるわけではない。（ここで論じるということが、自然科学・心理学のように声を出すこととして把握されてはならないのはもちろんである。）論じるとはつねに、何かについて論じること、何かについて意見を述べることであり、それを、他者に対して、そして他者と共に行なうのである。議論の対象は、他者の議論を通じて明らかにされ、接近可能となる。ロゴスは明らかにするのである（デェールーン）。しかし、定論といったもの（Gerede）が可能なところでは、他ならぬ人間的現存在にとって、落ちつきを見いだす（verfallen）という傾向が生じる。それは、《ひと》が他の介入を許さない可能性そのものである。特徴的なことに、論じるということは、大抵、事象の根源的な知識からは生じない。実際、すべてを自己の目で見て証明しておくなどといったことは不可能である。論じるということのかなりは聞きかじりに由来する。受け売りに特徴的なように、口にされた言葉は流通するうちに硬直し、同時に事象から遠ざかってしまう。定論の支配が強固なものとなるにつれ、世界は蔽われてしまう。このように、日常的現存在には、世界と自己それ自身とを蔽ってしまう傾向がある。蔽ってしまうというこの傾向が、現存在が自己に向き合うことができず公共性へと逃げ込むというあり方に他ならない。（DJ8,163f.）

まず、この引用の「人間は日常性においては自分のものとされていない」という記述に注目しよ

う。この「日常性」、そして、そこにおける「自分のものとされていない（uneigentlich）」存在様態、すなわち Uneigentlichkeit に対しては、「平均的日常性における現存在の在り方は、倫理的価値判断を交えてはならないというハイデガーによる注釈にもかかわらず、本来的な自己存在を喪失した在り方として、やはり否定的に捉えられていることは否めない」と述べる解釈者がいる[4]。しかし、日常性や Uneigentlichkeit は、この引用における「《ひと》はさしあたり、そして、大抵の場合、現存在を真の意味で支配しているのであり、学問すらこれに基づいている。《ひと》の問い方、《ひと》の探究への取りかかり方が示されるのは、伝統においてである」という記述に示されているように、問いや学問に関して用いられている。もちろん、*Un*eigentlichkeit は否定を表現している。しかし、それは、問いや学問に関する否定であり、「倫理的価値判断」における否定ではない。なるほど、「自分のものとされていない」という記述を導いている、その前の「定かならざるこのような《ひと》こそが現存在を支配している」や「われわれは大抵はわれわれ自身ではなく、他者なのであり、われわれは他者に生かされている」、「世界に目配りするうちに自己を喪失し、自己それ自身から脱落する」という記述は、その表現から、倫理的な観点において否定されるべきものであるとの印象を与えるかもしれない。しかし、これらの表現でハイデガーが述べているのは、「実際、すべてを自己の目で見て証明しておくなどといったことは不可能である」という記述に示されているように、現存在が、どれほど独創的であったとしても、自己で見いだしたわけでも自己で考えだしたわけでもない莫大な先人の知恵（伝統・定論）に依拠せざるを得ず、それどころか、大抵はそのような知恵に落ちつきを見いだし、その支配下にあるというあり方[5]、《ひと》と同じように思索し、その意味で、自己の頭ではなく、《ひと》の頭で思索しまっているというあり方である。現存在は、問いかけるという様態にあろうとも、すべてを自己の頭で思索することができるわけではない。問いかけるという様態の極まったあり方である学問的態度においても、先行研究を踏まえるなど先人の知恵に依拠している。特に疑問を抱くことなく日々を過ごしている場合、問いかけるという様態にない大抵の場合は尚更である。だが、これは、「『過少の』存在や『低次の』存在段階を意味してなどいない」（SZ,43）。後年になって述べられるように、落ちつきを見いだすのは「現存在の自然状態でさえある」（GA15,362）。これが――Eigentlichkeit との対比において――ひときわ目をひくときのあり方に、「日常性」という名

4　山本與志隆、「日常性の積極的意義――自己の本来性と非本来性の在り方の妥当性――」（宮原勇編『ハイデガー『存在と時間』を学ぶ人のために』、世界思想社、2012 年 12 月 10 日　第 1 刷発行）、240 頁。

5　定論（Gerede）や伝統（Tradition）、落ちつきを見いだすあり方（Verfall）が問いや学問に関わるものであることは、『存在と時間』でも、たとえば次の記述に示されている。
「極めて身近で平均的な、それゆえ、さしあたり歴史的でもある存在様態に関して、現存在の基礎的構造を後のために解釈しておこう。そうすれば明らかになるように、現存在は、自己が存在する場である世界に落ちつきを見いだす傾向を有するのみならず、そこからの反照で自己を解釈する傾向をも有している。また、これと不可分なのだが、現存在は、それなりに明確に把握された自己の伝統に落ちつきを見いだすのである。伝統は現存在から、問いかけ選ぶという自主性を奪ってしまう。」（SZ,21）
「それゆえ、定論は、もともと、それ自身のあり方として、論じられているものの立脚地への遡行を怠っているため、一つの閉鎖である。／この閉鎖はあらためて強固なものとされることがある。定論においては、論じられているものが理解されていると誤認されるだけであるにも関わらず、この誤認のせいで、新たな発問のいずれもが、そして対決のすべてが妨げられ、独特のあり方で抑圧・阻止されるからである。」（SZ,169）

称が与えられているのは、そのためである。もちろん、これも、「倫理的価値判断」において「否定的に捉えられている」のではない。「日常性」は、「さしあたり、そして、大抵の場合、現存在が存在するあり方（wie es *zunächst und zumeist* ist）」（SZ,16, vgl. SZ,320）が言いかえられたものであり、いま問題とされているのが問いかけるという様態である以上、これが意味するのは、問いかけるという様態がいまだ明確に自分のものされていないという意味で「さしあたり」、そして、明確に自分のものとされていないことが多いという意味で「大抵の場合」、現存在が存在するあり方である。このように、Uneigentlichkeit とは、とりわけ「日常性」に特徴的な存在様態[6]、《ひと》に落ちつきを見いだし、《ひと》に依拠するという非自立性のもと、問いかけが――殊更に掴みとられていないとか、時に抑圧されるなど――制約され、明確に自分のものとされていない存在様態である。

さて、Eigentlichkeit は、*Un*eigentlichkeit の否定以前のものである。そうすると、Eigentlichkeit は、問いかけが明確に自分のものとされた存在様態、それゆえ、明確に問いかけ、問いを提起するという存在様態として把握される。なるほど、Eigentlichkeit においても、現存在は先人の知恵（伝統・定論）を完全に無視することはできない。どれほど独創的な思索や問いかけであれ、先人の知恵を踏まえているからである。しかし、それでも、明確に問いかけることができるなら、現存在は問いを自分のものとしていなくてはならず、そのため、先人の知恵に全面的に依拠した「受け売り」の問いではなく、自己の問いを持っていなくてはならない。自己の問いを持つとは、先人の知恵による束縛から自由となり、これを自ら捉え直し、《ひと》の頭ではなく、自己の頭で思索し、自己の道を自己で切り開き、自己の問いを自ら提起するという自立性を意味する。このように、明確に問いかけ、問いを提起するという存在様態においては、徹頭徹尾、自己が問題になり、自己が掴みとられ、自己が自分のものとされている。この意味で、Eigentlichkeit は、《ひと》ならざる自己が「自分のものとされた存在様態」である。これは、Eigentlichkeit が「自己それ自身を『選択』・獲得するということ」（SZ,42）と表現されている点にも示されている。

２．問いかけるという存在様態における自己の重視について

以上のように、Eigentlichkeit においては、徹頭徹尾、自己が問題とされるが、それは、明確に問いかけ、問いを提起するということが、《ひと》による束縛から自由となり、これを自ら捉え

---

[6] Uneigentlichkeit は、「ところで、その時その時においてわたしのものであるがゆえに、存在することが可能であるというありようは自由であって、Eigentlichkeit か Uneigentlichkeit のいずれかへも、両者の様態の差異が問題とならないあり方へも開かれている。ここまでの解釈は、平均的日常性に発するものであるがゆえに、様態の差異が問題とならない実存、ないし、自分のものとされていない実存に制限されていた」（SZ,232）という記述に見られるように――Eigentlichkeit と対比されるなら――とりわけ日常性に特徴的であるものの、「uneigentlich な理解と同様に eigentlich な理解は、これはこれで、正当であることも不当であることも可能である。理解は、存在することが可能であるというありようであるがゆえに、徹頭徹尾、可能性によって貫かれている。しかし、理解のこれらの根本的な可能性の一方への切替は、他方を捨て去ることではない」（SZ,146）という記述に見られるように、日常性以外でも、現存在の実存から分離されるわけではない。現存在が先人の知恵を完全に無視することができない以上、それは当然である。

直し、自己の問いを自ら提起するということだからである。それゆえ、このような自己の重視に対して、「もし共同存在（われわれの事例では客観的次元における実存）が、《ひと》に落ちつきを見いだすあり方という特徴を有するとしたら、自己の回復への第一歩は必ずや非共同存在（*not-being-with*）でなければならず、その他から距離をとらねばならず、他の人々に巻き込まれてはならない。すなわち超越論的独我論（transcendental solipsism）でなければならない」と述べる解釈者がいるものの[7]、Eigentlichkeit における自己の重視は独我論と何ら関わりを持たない[8]。それは、「独自の見解（eine *eigene* Meinung）」や「彼独特の文体（der ihm *eigen*tümliche Stil）」という表現が独我論を意味するわけではないのと同様である。そして、ハイデガーが、問いかけるという存在様態すなわち Eigentlichkeit において自己以外の現存在を排除しているわけではないことは、先に見た引用の「論じるとはつねに、何かについて論じること、何かについて意見を述べることであり、それを、他の人々に対して、そして他の人々と共に行なうのである（Rede ist immer Reden über etwas und Sich-Aussprechen über etwas, und zu und mit anderen）。議論の対象は、他の人々の議論を通じて明らかにされ、接近可能となる。ロゴスは明らかにするのである（デェールーン）」という記述にも示されている[9]。それのみではない。カッセル講演には次のような記述さえ見いだされる。

> 現象論（die Phänomenologie）はまず、次第に可能性に入り込み、自己を伝統から解き放たねばならない。そして、その後、過去の哲学を自己に対して閉ざされざるものとなし、自分のもの、自身のものとしなくてはならない。現象論における探究手法からは、必然的に、さまざまな方向を目ざす問いかけが生じてくる。もっとも、現象論学派といったものがあるわけではない。あるのは、さまざまな方向を目ざす研究であり、これは互い自身を相互批判に晒すのである。（DJ8,160）

ここに示されているように、ハイデガーの考えでは、存在の問いの方法である現象論において、現存在は「まず」「自己を伝統から解き放」ち、すなわち、Uneigentlichkeit を脱し、「その後」「過去の哲学を〔……〕自分のもの、自身のものとし（eigentlich aneignen）なくてはならない」、すなわち、Eigentlichkeit という存在様態に至らなくてはならない。そして、このとき「必然的に

---

7 Christopher Macann, Who is Dasein? Towards an ethics of authenticity, in: *Martin Heidegger, Critical assessments IV*, Routledge, London and New York, 1992, p.241.

8 なるほど、『存在と時間』にも、「実存論的『独我論（Solipsismus）』」（SZ,188）という表現が見いだされる。しかし、括弧がつけられていることから明らかなように、これは、一般に理解される独我論ではない。それどころか、この「実存論的『独我論』」は、「まさに極限の意味において、自己の世界を世界として扱い、その前へと現存在をもたらし、そして、それに伴い、現存在そのものを、世界内存在である自己そのものの前へともたらすのである」（SZ,188）と述べられているように、一般に理解される独我論の反対を意味している。また、そもそも、ハイデガーは「孤立した主観（ein isoliertes Subjekt）」に関して、「それでは、世界内存在という現象は的確に捉えられていない」（SZ,206）と述べている。

9 同様のことは、『存在と時間』にも記されている。次を参照されたい。
「ロゴスは何かを、つまり、論じられている対象を見えるようにする（ファイネスタイ）のであり、しかも、論じている者に（自分に）、ないし、一緒に論じている人々に見えるようにするのである。」（SZ,32）

(notwendig)」与えられるとされているのが「さまざまな方向を目ざす研究であり、これは互い自身を相互批判に晒すのである(verschiedene Richtungen der Arbeit, die sich selbst gegenseitiger Kritik unterwerfen)」。つまり、ハイデガーの Eigentlichkeit において、自己以外の現存在は排除されないどころか、「相互批判」のため必要とされているのである[10]。

相互批判が必要とされるのは、通常、さらに深く問いかけるためである。そして、ハイデガーもそのように考えていることは、たとえば、次の引用に示されている。

> 真の自己省察が意味をもち、可能となるのは、それが現に存在するときのみである。そして、これが現に存在するのは、厳密に呼び覚まされたときのみである。さらに、真の自己省察が厳密に呼び覚まされうるとき、他者が思いやりの対象としてではないが、どこかで反省のうちに巻きこまれる。すなわち、哲学の対象を自分のものにしようとするとき、それが方法の適用の厳密さへと結びつけられているのは、他者の目前においてなのである。方法が適用されるさいの厳密さは、どのような学問よりも優先される。なぜなら、学問においては、ただ、事象に即するという要求が決定的であるのに、哲学の事象には、哲学遂行者自身と(哲学遂行者自身の)周知の乏しさが付きまとっているからである。(GA9,42)

> しかし、このような意思疎通には、真の相互理解のもつ歴史的で創造的な力が欠けている。真の相互理解とは、理解者たちを互いに変貌させ、そうして、他ならぬ理解者たち自身――これは、つねに、もっとも確実でありながら、もっとも包み隠されたものである――を更に近くにもたらしてくれるからである。もっとも、自分の核心とはつねに、もっとも確実でありながら、もっとも隠蔽されたものである。〔……〕eigentlich な相互理解が生みだすのは鎮静化ではない。それでは、ただちに互いの無関心へと陥ってしまう。eigentlich な相互理解は、それ自身、共通の歴史的課題への気づかいから、相互に相手を問いのうちにもたらすという安定を欠くあり方をしている。(GA13,17)

Eigentlichkeit は、以上で見たように、明確に問いかけ、問いを提起するという存在様態として捉えられている。このような存在様態、すなわち、自己の問いを自ら提起するという存在様態が「自分のものとされた様態」であるとは、この様態において、《ひと》ではなく自己が自分のものとされるということ、そして、同じく問いかけるという存在様態にある他の現存在からの批判――それゆえ、相互批判――を通じて、更に根源から自己が自分のものとされるということを意味している[11]。このように、ハイデガーの把握する Eigentlichkeit においては、徹頭徹尾、自分の

---

[10] ハイデガーの考えでは、現象論には対話が不可欠である。次の記述を参照されたい。
「だが、じっくり考えてみなければならないが、現象論を学ぶことができるのは書物に目を通すことによってではなく、対話を重ねることによってのみである。」(GA14,149)

[11] ハイデガーが学問において他者を重視していることは、すでに 1919 年の講義で述べられている(GA56/57,4)。

ものとされる自己が問題とされている。しかし、それは、倫理において問題となる自己や、世界や他者を欠いた自己などではない。Eigentlichkeit の理解を欠く者――Eigentlichkeit を言葉の上でしか理解しない者、Eigentlichkeit を倫理的な観点から捉える者、Eigentlichkeit に独我論を読みこむ者――は、Eigentlichkeit における自己が、問いかけるという存在様態において問題となる自己であることを理解していない。

3．現存在の把握に基づくものとしての Eigentlichkeit

以上で見られたように、Eigentlichkeit は、問いかけるという存在様態であり、自己が問題となっても、それは、この存在様態に関してである。自分のものとされた存在様態、そして、それに関する自己としては――これらの表現からは――他のものも考えられうるにも関わらず、ハイデガーがこれらを問いかけに制限するのはなぜか。ここには、どのような「関心」が込められているのか。

この点を確認するために、『存在と時間』における用語としての現存在の初出箇所を見てみよう。ハイデガーによる Eigentlichkeit の把握は、それが現存在の存在様態であるがゆえに、現存在の把握に基づくからである。それは次のようなものである。

> 存在はどのようなものかという問いが明確に提起され、この問いそのものが余すところなく洞察されなくてはならないなら、この問いを確立するために必要とされるのは、これまでの説明に従えば、存在に目を向ける手法や、意味を理解したうえで概念として把握する手法の解明、存在しているもののモデルの正しい選択を可能にするための準備作業、この存在しているものへ純粋に接近する手法の明確化である。何かに目を向ける行為、何かの理解･把握、選択、何かへの接近は、問いかけ（Fragen）を構成する態度であり、それゆえ、それ自身が一定の存在しているものの、すなわち、われわれという存在しているものの存在様態（Seinsmodi）である。われわれ問いかけを行なう者（die Fragenden）が、その時その時において、自身、このような存在しているものなのである。存在の問いの確立が意味しているのは、それゆえ、存在しているもの――問いかけを行なう者（das fragende［Seiende］）――を、その存在において洞察することである。この問いを問いかける行為（Fragen）は、存在しているものの存在様態（*Seins*modus）であり、それ自身、問いかけにおいてどのようなものかと問われているものから――存在から――本質において規定されている。われわれ自身がその時その時において、このような存在しているもの、とりわけ、問いかけて（Fragen）存在する可能性を有して存在しているものである。このような存在しているものにわれわれは現存在という用語を与えたい。存在の意味はどのようなものかという問いを洞察し、明確に提起するためには、存在しているものの一つ（現存在）を、その存在に関して、先行して適切な仕方で解明する必要があるのである。（SZ,7）

この引用に繰りかえし述べられているように、現存在とは、「存在様態」として「問いかけ」

を有して存在しているもの[12]、さらに正確には、「とりわけ、問いかけて存在する可能性を有して存在しているもの」である。

このように、現存在は、すでにそれだけで、問いかけるという存在様態を有するものとして把握されている。しかし、現存在は、問いかけをつねに自分のものとしているわけではない。それは、「問いかけて存在する可能性を有して」という記述にも示されている。それゆえ、現存在に関しては、それが「その時その時において（je）」実際に問いかけるという「存在様態」のうちにあるか否かが問題とならざるをえない。そして、このような現存在の特徴の第二として挙げられているのが Jemeinigkeit（その時その時においてわたしのものであるか否かというあり方）であり（SZ,42f.）[13]、これにより規定される存在様態――そして、ハイデガーが「とりわけ」問題とする存在様態（vgl. SZ,328）――が、「その時その時において」「自分のものとされた存在様態」（Eigentlichkeit）か否（Uneigentlichkeit）かである。つまり、現存在の特徴の説明において挙げられる存在様態の Eigentlichkeit か否かは、現存在の把握における、「その時その時において」問いかけるという「存在様態」のうちにあるか否かに基づいている。カッセル講演の具体的記述に認められた、問いかけるという存在様態としての Eigentlichkeit は、ハイデガーによる現存在の把握そのものに基づいているのである[14]。

ハイデガーが現存在を、問いかけるという存在様態を有するものとして把握するのはなぜか。

---

[12] それゆえ、現存在が人間と言いかえられていても、それは、問いかけるという存在様態を有するかぎりでの人間であり、食事をとるとか、睡眠をとるなどといった存在様態にある人間ではない。次を参照されたい。
「一般に学問には、真なる定理を基礎づける繋がりを纏めあげたものという規定が可能である。しかし、この定義は調ったものでもなければ、学問を本来の意味で捉えているわけでもない。学問は人間の態度であるがゆえに、この存在しているもの（人間）の存在類型を有するのである。この存在しているものにわれわれは現存在という用語を与えたい。学問研究は、この存在しているものに可能な唯一の存在類型でも、極めて身近な存在類型でもない。」（SZ,11）

[13] Jemeinigkeit は、文字どおりには、「その時その時においてわたしのものであること」であるが、「Eigentlichkeit と Uneigentlichkeit という可能性の条件」（SZ,53）であることも踏まえ、本稿では、「その時その時においてわたしのものであるか否かというあり方」と訳したい。

[14] 『存在と時間』の第一部第二篇では、問いかけるという存在様態が主題として扱われているわけではない。しかし――先の引用を繰りかえすことになるが――第一部第二篇の最初の節にある「ところで、その時その時において（je）わたしのもの（*meines*）であるがゆえに（Jemeinigkeit を指す――引用者）、存在することが可能であるというありようは自由であって、自分のものとされた存在様態（Eigentlichkeit）か、自分のものとされていない存在様態のいずれかへも、両者の様態の差異が問題とならないあり方へも開かれている。ここまでの解釈は、平均的日常性に発するものであるがゆえに、様態の差異が問題とならない実存、ないし、自分のものとされていない実存に制限されていた」（SZ,232）という記述に見られるように、第一部第二篇における Eigentlichkeit とは、第一部第一篇で制限されていた事象が自分のものとされるということであり、これは、現存在の具体的な存在様態としては、問いかけるということである。また、「《ひと》から自己を連れもどそうとするなら、すなわち、《ひと》自身を実存において変様し、自分のものとされて自身で存在する（*eigentliches* Selbstsein）ようにするなら、それは、一つの選択の取りもどしとして遂行される必要がある。ところで、選択の取りもどしが意味しているのは、選択を取りもどすというこの選択を行なうということ、すなわち、自分の自身から存在することが可能であるというありよう（ein Seinkönnen aus dem eigenen Selbst）へと決断するということである。選択を行なうなか、現存在が自己に可能にするのは、第一に、自分のものとされて存在することが可能であるというありよう（sein eigentliches Seinkönnen）である」（SZ,268）という記述の末尾の Seinkönnen に後に付けられた註には、「存在が生じること――哲学、自由（Seinsgeschehnis --- Philosophie, Freiheit）」とある。「自分のものとされて（eigentlich）存在することが可能であるというありよう」とは、「存在が生じること――哲学、自由」、すなわち、存在という事象が生じてくるなか、現存在が自由となり、事象へと開かれ（vgl. GA22,64f.）、哲学的思索を遂行すること、問いかけるということである。

それは、引用に見られるように、ハイデガーが現存在を必要とするのが、「存在はどのようなものかという問いが明確に提起され、この問いそのものが余すところなく洞察されていなくてはならないなら」、「存在の意味はどのようなものかという問いを洞察し、明確に提起するためには」という制約のもとにおいてであるから、すなわち、ハイデガーを捕らえているのが、存在の問いを明確に提起するという「関心」であるからである。存在の問いを明確に提起するという「関心」のもと、まず、現存在すなわち「問いかけて存在するという可能性を有して存在しているもの」が必要とされ、次に、この可能性が自分のものとされた存在様態として、Eigentlichkeit、すなわち、問いかけるという存在様態が自分のものとされなくてはならない。そうでなければ、存在の問いが明確に提起されない。Eigentlichkeit には、存在の問いを明確に提起するという「関心」が込められているのである。先に触れた Eigentlichkeit の理解を欠く解釈者たちも、ハイデガーの関心が、存在の問いの明確な提起に存することは理解しているはずである。Eigentlichkeit に関しても、この理解を一貫させなくてはならない。

結語

Eigentlichkeit に対しては、「authenticity（本来性）の理念はハイデガーの著作を決定的に台なしにしてしまった。そのため、authenticity は、ハイデガーが主張していたようなもの、つまり、人間の実存を存在論的に適切に分析するための必須の要素とはなっていない」[15] といった批判が寄せられることがある。しかし、このような批判は斥けられなければならない。というのは、いま見たように、Eigentlichkeit には、存在の問いを明確に提起するという「関心」が込められているからである（vgl. SZ,14）。Eigentlichkeit は、「ハイデガーが主張」するとおりの、問いや分析のための「必須の要素」以外の何ものでもないのである。なるほど、ここには、一定の「関心」が認められる。そして、「ところで、現存在の実存が存在論の見地から解釈されたが、その根底には、存在に則する見地からする、自分のものとされた（eigentlich）実存の一定の把握が、現存在の事実として与えられた理想があるのではないか。実際、その通りである」（SZ,310）という記述に見られるように、ハイデガー自身もこの点を自覚している。だが、Eigentlichkeit は、「関心」が込められているという理由で斥けられてよいものではない。それでは、あらゆる問いかけが封じられてしまう。重要なのは、まずは問いかけるという存在様態に飛びこみ――相互批判を通じて[16]――問いかけるという存在様態を更に根源から自分のものとし、「勇気」をもって、任意の問いではなく、「唯一の問い」（N1,579, vgl. GA21,224）に向かうことである。そのために自分のものとされるのが Eigentlichkeit である。なるほど、ハイデガーにとって、Eigentlichkeit は、第一には、存在の問いを明確に提起するためのものである。しかし、存在の問いは、「存在に則した

---

[15] Herrman Philipse, *Heidegger's Philosophy of Being: A Critical Interpretation*, Princeton, Princeton University Press, 1998, p.321.

[16] これは、次のようにも表現されている。
「思索者たちのあいだの争いは、事象そのものの『愛を伴う争い』である。この争いは代わる代わるに彼らを助け、同一のものに単純に帰属させる。この同一のものから思索者たちは、存在が遣わされる運命のうちに、それに適したものを見いだすのである。」（GA9,336）

学問に先行し、これらに基礎を与える存在論それ自身を可能にする条件」（SZ,11）を目ざすものでもある。すなわち、ハイデガーの意図するところでは、Eigentlichkeit は、同時に、それぞれの学問に基礎を与えるものである。そうである以上、Eigentlichkeit は、知を肯定する万人によって、自分のものとされなくてはならない。それは、Eigentlichkeit が、問いかけるという存在様態である以上、ハイデガーの思索に反対する者にも当てはまるのである。

註　Vittorio Klostermann 社のハイデガー全集（Gesamtausgabe）からの引用箇所は、GA の後に巻数と頁数をつけることで記す。その他の本の略号は以下の通り。

SZ: *Sein und Zeit*, Tü bingen, 17. Aufl., 1993.

N1: *Nietzsche erster Band*, 5. Aufl., Pfullingen, 1989.

DJ8: Wilhelm Diltheys Forschungsarbeit und der gegenwärtige Kampf um eine historische Wetanschauung, in: *Dilthey-Jahrbuch für Philosophie und Geschichte der Geisteswissenschaften*, Band 8, hrsg. v. Frithjof Rodi, Vandenhoeck & Ruprecht in Göttingen, S.142-180, 1993.

（なかはしまこと　電気通信大学・准教授）

On the interest of *Eigentlichkeit*

Makoto NAKAHASHI

Heidegger's term *Eigentlichkeit* is generally translated into *authenticity*. But this term is chosen terminologically in a strict sense. In consideration of this, the term should be translated into *owned-ness*, because *eigen* means *own* and is the past participle in its origin. What does *Eigentlichkeit* mean as *owned-ness?*

In a lecture Heidegger describes *Eigentlichkeit* as a modus of *Dasein* who asks for his or her matter. In order to ask for his or her matter, *Dasein* is not allowed to depend upon common knowledge, but has to think in his or her *own* way and to have *owned* anew his or her *own* question. First, *Eigentlichkeit* is *owned-ness* in this sense. And in order to raise his or her *own* question, *Dasein* has to be in the questioning modus, that is to say he or she has to have *owned* the questioning modus, i. e. *Eigentlichkeit. Eigentlichkeit* is *owned-ness* in the double sense.

One might say that the above grounds only on *my* interest, especially because, as Adorno insists, the interest of interpreters tends to steal into the term *Eigentlichkeit* itself. However, this is Heidegger's own interest. As the modi of *Dasein*, Heidegger mentions only *Eigentlichkeit* and its negation (*Uneigentlichkeit*). And Heidegger grasps *Dasein* as an entity which *owns* a questioning modus, without which he can not raise his own question. In the term *Eigentlichkeit* lies Heidegger's own interest.

Eigentlichkeit should not be rejected only because it is based on the individual interest. Without interest, no one can ask for his or her matter. What is important, is to raise his or her own question, not to lose his or her courage to pursue the truth, and to find the ultimate question. *Eigentlichkeit* in this sense should be highly esteemed by all researchers.

「キーワード」

Eigentlichkeit、Jemeinigkeit、存在様態、自己、問いかけ